

中上級学習者の格助詞に関する中間言語について⁽¹⁾

浅山佳郎

[キーワード] 中間言語・格助詞・語順

1. はじめに

1.1. 目的

本稿は、中上級の日本語学習者の中間言語における格助詞の使用に、どのような規則が見られるかを論ずるものである。以下の考察を通して、本稿で名詞句の「距離」と呼ぶ要因が格助詞使用を決定する規則として働いている可能性があることを示す。

1.2. 資料

本稿で扱う資料は、論者が1996年に大学の留学生日本語クラスで実施した助詞の穴埋めテストである。これは200～400字程度の文章の格助詞部分を（ ）に抜いて設問し、学習者に解答させるもので、本稿で整理の対象としたのは、全部で253種の設問、1440個の解答である。なお、学習者は全部で12名であり、母語は、中国語が6名、英語が2名、オランダ語が1名、デンマーク語が1名、韓国語が1名、インドネシア語が1名である。

また、本稿で扱う助詞は、基本的に格助詞であるが、格助詞と同じ位置に現れうる「ハ・モ・ダケ・サエ」といった助詞を合わせて、「提題取立」助詞と呼び、必要に応じて以下の議論でも取り上げる。

さらに、格助詞は「ガ格」「ヲ格」「ニ格」「デ格」「斜格」に分ける。「斜格」という用語には本来、「ニ格」の一部と「デ格」を含むべきであるが、本稿では、数量上のバランスから、「ニ格」と「デ格」を独立させ、それ以外の「カラ・ヘ・ト・ヨリ・マデ」を、その他の斜格として、便宜上「斜格」と呼んでおく。

1.3. 分類

本稿では、学習者の解答を「正用」と「回避」に分類する。ここで言う「回避」は、「正用」ではないものすべてを指す。これを「誤用」と呼ばないのは、「正用」ではないものの中に、以下の例のような「誤用」ではないものが含まれるからである⁽²⁾。

- (1) a 宮沢さんは赤のブラウス (と) ピンク色の着物をまとって現れた。
 b 左手首を着物の袖 (に) 隠すしぐさも見られた。

設問としては、aは助詞「に」が、bは「で」が期待されるところである。そこに「と」と「に」が解答されている。これらは設問で期待される解答ではないという意味で「正用」ではないが、また単文として見た場合は、もとの文とは語用論的に意味を異ならせる場合が多いものの、それでも許容可能な助詞である。本稿ではこうした例を「代替」と呼び、「誤用」と合わせて、「回避」と分類する。

これを「回避」と呼ぶのは、これらの助詞を、「正用」の助詞が分からなかった場合に学習者が戦略的に選択する助詞とみなすためであり、中間言語の助詞使用規則を、学習者のそうした戦略の中で考えたいからである。ただし学習者自身は、「回避」した助詞を「正用」と思いこんでいる場合もあるはずであり、ここでいう「戦略的な選択」は、学習者に意識されるものではない。しかしこれらを「正しい」助詞を選択できない場合に助詞が無くなることを「回避」するため、2次的に選択される助詞であると考えることによって、「正用」の助詞使用を決定する各種の文法的規則のほかに⁽³⁾、中間言語としての助詞使用規則を想定することが可能になると考える。

また本稿では、「回避」と「正用」を合わせて「使用」と呼ぶ。これは正しいのも正しくないのも合わせた学習者の解答全てを指すもので、中間言語における助詞使用全体を意味する。これに対し、穴埋め問題で期待される正答を「設問」と呼ぶ。設問された各助詞は、もともとの「正しい」日本語であるので、この「設問」は、本来の日本語における助詞使用を意味する。これらの呼び方は、本稿の表中などで便宜上しているものである。

1.4. 母語による差の問題

以下の問題を単純化するため、まず、中間言語における助詞の使用に対して、母語の影響がそれほど大きくないことを指摘しておく。下の表1に見るように、数量的にまとまっている中国語を母語とする学習者と、英語、オランダ語およびデンマーク語を母語とする学習者の使用状況を見た場合、最大限1割程度の差に収まっており、それほど大きな差は見られない。なお、この表は、中国語母語話者の「正用数」および「使用数」を「1.00」とした時の英語、オランダ語およびデンマーク語の母語話者の比である⁽⁴⁾。

表1：中国語母語話者に対する英語などの母語話者の比

	斜格	デ格	ニ格	ヲ格	ガ格	提題取立
使用された各助詞の正用率比	1.10	0.97	1.01	0.91	1.05	1.06
設問された各助詞の正用率比	1.00	0.91	0.98	1.00	0.99	1.09
各助詞の使用率比	0.76	0.98	0.96	1.20	0.96	1.07

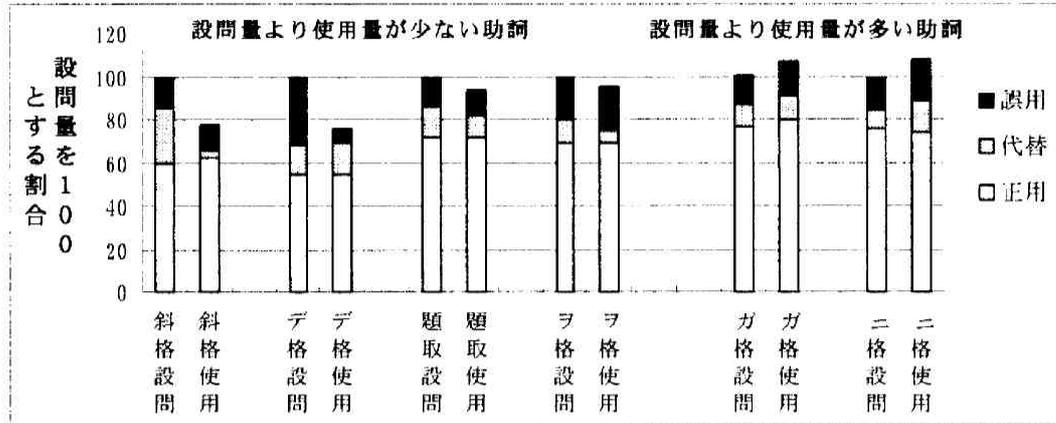
2. 格助詞の分布

2.1. 「設問」と「使用」における各格助詞の使用量と正用率

まず、各格助詞の使用状況を概観する。

以下のグラフは、助詞の使用数とそのうちわけとなる正用および非正用の割合を示している。各助詞別の「設問」は、当該の助詞の設問数量を100とした場合の、「正用」「代替」「誤用」の割合である。「デ格設問」であれば、「デ」が正答として期待されるところでの「正用」「代替」「誤用」の割合がそれぞれ約60、25、15程度であることを示しており、使用数比は当然100である。これに対して、「使用」は、設問数量を100とした場合の、実際に当該の助詞が使われた数量を示す。「デ格使用」であれば、棒全体は学習者が「デ」と解答したものの全ての数の「設問」量に対する比で、約77程度になり、そのうちわけの「正用」「代替」「誤用」が約55、15、7程度であることを示している。

グラフ：中上級者の助詞使用状況



このグラフは、中間言語において用いられる助詞が2種類に分けられることを示している。1つは、「斜格」「デ格」「ヲ格」に「提題取立」を加えたもので、設問量より使用量のほうが少ない助詞である。もう1つは、「ガ格」と「ニ格」で、設問量より使用量が多い助詞である。

前者は、正用率もやや低くなっており、当該助詞が「設問」された場合の「回避」のほうが、当該助詞を他の助詞の設問に対して「回避」的に「使用」する場合より多いものである。後者は、正用率が70%以上で安定しており⁶⁾、当該助詞が「設問」された場合の「回避」よりも、「使用」における「回避」のほうが多いものである。

2.2. 「使用」および「回避」における使用率の変化

つぎに、「設問」された格助詞に対して、「使用」および「回避」で当該の助詞の使用量にどのような変化があるかを見る。以下の表2である。この表の「設問」「使用」「回避」の各欄は、それぞれの場合の助詞総数に対する各助詞の占有率をパーセンテージで示したものである。「使用／設問」は、実際の「使用」におけるある助詞の占有率を「設問」におけるその助詞の占有率で割った比であり、「使用」全体における当該助詞の用いられやすさを示す。「回避／使用」は、「回避」におけるある助詞の占有率を「使用」全体におけるその助詞の占有率で割った比であり、正解がわからない場合における当該助詞の用いられやすさを示す。たとえば「斜格」の場合、「使用／設問」が「0.81」、「回避／使用」が「0.76」であるから、格助詞「カラ・ヘ・ト・ヨリ・マデ」は、設問量に対して8割程

度の占有率でしかなく、全体的に用いられやすすくない助詞であるうえ、さらに正しい答えがわからない場合は、使用量の76%の占有率しかなく、より用いられにくい助詞であることを示している。

表2: 「設問」「使用」「回避」における各助詞の使用率変化

	設問	使用	使用／設問	回避	回避／使用
斜格	9.7%	7.9%	0.81	6.0%	0.76
デ格	11.6%	9.2%	0.79	9.8%	1.06
ヲ格	12.4%	12.4%	1.00	12.6%	1.02
ガ格	17.6%	19.9%	1.13	19.2%	0.96
ニ格	23.4%	26.0%	1.11	31.2%	1.20
提題取立	25.2%	24.6%	0.97	21.1%	0.86

この表2および先に見たグラフから見ると、中上級者の中間言語における格助詞は、「ヲ格」を中間にはさんで「斜格」と「ニ格」が対極の位置にあり、中間の「斜格」よりに「デ格」が、「ニ格」よりに「ガ格」が分布している。

これは、中間言語としては、「ニ」がもっとも使われやすく、そこから「ガ」「ヲ」「デ」の順に使われにくくなり、「カラ・ヘ・ト・ヨリ・マデ」がもっとも使われにくいということを意味する。

「カラ・ヘ・ト・ヨリ・マデ」および「デ」などの「斜格」は、その形式と意味との対応が複雑で、把握に困難を生じさせやすい。「ガ格」や「ヲ格」が、実際には複雑な意味と形式の対応があるとしても、学習者にはそれぞれ「主格」「目的格」と把握され、困難を強く感じさせないのと逆である。そういう意味で、「ガ・ヲ・ニ」といった格助詞は、一般的でより普遍性の高い意味格に対応すると学習者に把握され、過剰に使用されるのに対し、「カラ・ヘ・ト・ヨリ・マデ・デ」といった格助詞は、意味的な制限が多くて難しいと学習者に把握され、使用が抑制されるという可能性がある⁶⁾。上で見た使用されやすさの分布の理由として、こうした把握の可能性を考慮することができる。

「斜格」の使用が抑制されていること、さらに「斜格」に「回避」使用が少ないことは、中上級者の中間言語においても、「カラ・ヘ・ト・ヨリ・マデ」という助詞の使用が、これらの助詞の持つ本来的な規則、つまり動詞

との格パターンおよび付与される名詞句の意味素性などによって決定されていることを示すと考えることができる⁽⁷⁾。

2.3. 「回避」助詞としての使われやすさの問題

つぎに、各助詞ごとに、「回避」する場合にどの助詞が用いられやすいかを見る。前の「2.2」項の議論は、「回避」全体においてどの助詞が使われやすいかを見るものであったが、本項は、個別の各助詞の「設問」に対して、正しい解答を導けない場合、どの助詞に「回避」しやすいかを見るものである。

表2の「回避」における各助詞の占有率は、言い換えれば、平均的にどの助詞に「逃げやすいか」を示すものである。これに対してここでは、「設問」されたそれぞれの助詞について、正しく当該の助詞を導けない場合にどの助詞が用いられるかを、その平均的な「逃げやすさ」に対する偏向として見る。これを示す数値を、次の(2)の式によって求め、さらにその結果を(3)の基準で判断して示したのが表3である。

$$(2) \frac{\text{ある設問に対するある「回避」助詞の数}}{\text{その設問の総数}} \bigg/ \frac{\text{その「回避」助詞の使用総数}}{\text{全「回避」総数} - \text{その設問と同じ助詞の「回避」使用数}}$$

- (3) a 1.3 以上 = より回避しやすい助詞として、◎で示す
 b 0.7 ~ 1.3 = 平均的な回避を示す助詞として、○で示す
 c 0.7 未満 = より回避しにくい助詞として、●で示す

表3：ある助詞が「回避」される場合の選択されやすさ

	斜格	デ格	ニ格	ヲ格	ガ格	提題取立
斜格		◎	◎	●	○	●
デ格	●		◎	○	●	◎
ニ格	◎	◎		○	○	●
ヲ格	○	○	○		◎	○
ガ格	●	●	○	◎		◎
提題取立	●	●	○	●	◎	

この表では、左右の軸が重なるラインを中心にして、その周囲に比較的「回避」しやすいことを示す「◎」と「○」が分布し、その外側に「回避」しにくいことを示す「●」が分布している。これは、「斜格」が「デ格」や「ニ格」に連続し、「ニ格」が「ヲ格」や「ガ格」に連続し、「ガ格」が「提題取立」に連続するというように、この表で隣り合うもの同士がより「回避」相手として選択されやすいことを意味している。この関係は、以下のような格の連続を示す。

(4) 斜格<デ格<ニ格<ヲ格<ガ格<主題

これは、Keenan & Comrie(1977)の示す名詞句階層ともほぼ適合する。つまり、どの格助詞を選択するかは、本来、動詞句の格パターンや名詞句の意味素性によって限定的に指示されるのであるが、中間言語体系においてはそうした限定がゆるめられて、Keenanらの示す名詞句階層にしたがって、本来は限定的に指示されるはずの格の前後に、その指示が拡散していることになる。

2.4. 問題点

以上の議論を通して、もっとも問題となるのは、以下の2点である。

- (5) a 中間言語における「ヲ格」と「ニ格」の弁別的な選択決定規則は何か。
- b 中間言語における「ガ格」の選択決定規則は何か。

とくに「ニ格」については、2.2項で見た使用頻度について見ても、意味格との対応がより明示的な「ガ格」や「ヲ格」に比べて、より複雑な意味格との対応を持つはずなのに、なぜより広く使われるのか、という問題がある。また、2.3項で見た名詞句階層について見ても、隣り合う「ヲ格」と「ニ格」相互に「回避」が少なく、かつどちらも全ての格助詞に対して「回避」されやすいのは、これらが名詞句階層からはずれているのではないか、という問題がある。

3. 名詞句「距離」

3.1 名詞句「距離」の概念

上で見た問題点について、これらを決定する中間言語における助詞選択決定規則として、本稿では当該の助詞が置かれている「距離」情報が重要な要因となっているという仮説を考える⁽⁸⁾。

ここでいう名詞句の「距離」とは、ある格助詞を加えられた名詞句が、それをコントロールする動詞に対して、どれくらい離れているかを考えるもので、以下の3種類を設定する。

- (6) a 1項前＝当該の名詞句と動詞が隣り合っている場合
 b 2項前＝当該の名詞句と動詞の間にもう1つ別の項名詞句がある場合
 c 3項前＝当該の名詞句と動詞の間にもう2つ別の項名詞句がある場合

「1項前」には、あいだに短い副詞が入っている場合も含める。また、当該の名詞句と動詞の間に3つ以上の別の項名詞句が現れる場合もあるが、きわめて少数の例であり、これらは、「3項前」に含めて考えることとする。下の例文 a が「1項前」、b が「2項前」、c が「3項前」である。

- (7) a 石川県は、中部地方の日本海側にあり、南西側で福井県（に）接している。
 b 2・3世紀ごろ、北九州（に）多くの小さい国があったことが知られている。
 c 周辺（で）は中国が海底油田の掘削探査を進めている。

この名詞句の「距離」情報は、本来の日本語でも、使用される助詞と相関的な関係にあると仮定することができる⁽⁹⁾。つまり、各格助詞はランダムに現れるのではなく、「ガ・ヲ・ニ」という3項の述語句であれば、「ヲーニーガーV」という順より「ガーニーヲーV」のほうが自然であり、その意味で「ヲ」は「1項前」に多くなり、「ニ」「ガ」は「2項前」や「3項前」になるだろうという考え方である。

なおこれは、名詞句の「距離」情報が使用助詞を決定するという統語規則を意味するものではない。ただし、名詞句の「距離」と使用助詞に相関的な関係があるとすれば、学習を通じて獲得されるそうした情報は、学習者が使用助詞を決定する場合の参考となるはずである。つまり中間言語としては、名詞句「距離」は助詞使用を決定する規則として働く可能性があるということになる。以下、そのことを検証する。

3.2. 名詞句「距離」の測定方法

名詞句の「距離」と助詞との関係を見るには、各「距離」における助詞の使用が平均的な助詞の使用とどれほど異なるかを調べる必要がある。

これは、各助詞の占有率比によって示すことができる。まず、各格助詞が、すべての「距離」において、どれだけの割合を占めるかという助詞全体に対する占有率を出す。ついで、名詞句の各「距離」における、各助詞の占有率を調べる。後者を前者で割ると、各「距離」における各助詞の占有率が、平均的な占有率とどれくらい違うか、いいかえれば、「距離」によってその助詞の使用がどれくらい影響を受けるかを示す指数を得ることができる。以下の式である。

$$(8) \frac{\text{ある「距離」におけるある助詞の数}}{\text{ある「距離」における全助詞数}} \bigg/ \frac{\text{全ての「距離」におけるある助詞の数}}{\text{全ての「距離」における全助詞数}}$$

この指数が「1.00」に近ければ、「距離」の影響を受けておらず、「1.00」以下になれば、その「距離」がその助詞の使用を「抑制」し、「1.00」以上になれば、その「距離」がその助詞の使用を「励起」する、ということになる。

まず、本来の日本語における状況を見るために、「設問」された助詞について「距離」との関係性を調べる。さらに同じ計算を「使用」された助詞に行うことで、中間言語においても、それぞれの「距離」が、それぞれの助詞の使用を「抑制」するのか、「励起」するのか、あるいはランダムなのかを見ることができる。

3.3. 名詞句の「距離」と格助詞との相関

結果は、以下の表4である。

表4: 「設問」と「使用」における
各「距離」の助詞「抑制/励起」状況指数

距離	ガ格		ヲ格		ニ格		デ格		斜格	
	設問	使用								
1項前	1.53	1.44	1.22	1.33	1.16	1.08	0.82	0.85	1.14	1.20
2項前	0.19	0.21	0.66	0.60	0.87	0.91	1.25	1.13	0.61	0.76
3項前	0.11	0.56	0.62	0.08	0.31	0.75	1.42	1.57	1.35	0.46

この表は、日本語において、名詞句の動詞に対する「距離」が、その名詞句に加えられる助詞とある程度の相関関係を持つことを示している。さらに、その相関関係が、「設問」の示す本来の日本語と、「使用」の示す中間言語としての日本語で同じ方向であることも示している。具体的な「距離」の作用としては、次のことを指摘できる。

- (9) a 「1項前」は、「ガ格」を強く「励起」し、「ヲ格・ニ格・斜格」もやや「励起」するいっぽうで、「デ格」はやや「抑制」する。
 b 「2項前」と「3項前」は、「デ格」を「励起」するいっぽうで、「ガ格」を強く「抑制」し、「ヲ格・ニ格」をやや「抑制」する。
 c 「3項前」は、「斜格」を「励起」し、「2項前」は「抑制」する。

3.4. 中間言語における名詞句「距離」の影響

上述した「距離」と格助詞の相関において、「設問」における「抑制・励起」と、「使用」における「抑制・励起」がほぼ同じ数値であれば、名詞句の「距離」という要因は、中間言語体系を本来の日本語体系と異ならせるものではなく、中間言語としてはこれを無視してよいことになる。しかし、上の表4にも見えるように、「励起・抑制」の方向は同じであるものの、数値は明らかに異なっている。つまり、学習者は名詞句の「距離」の把握に問題を持っていることになる。

これを明確にするため、「設問」から「使用」さらに「回避」へ向けて、「抑制・励起」の変化が拡大しているか縮小しているかを調査する。もし、

本来の日本語における「距離」と格助詞の相関関係の変化が、「使用」から「回避」へ連続して拡大または縮小しているとするならば、中間言語には、本来の日本語とは異なる独自の名詞句「距離」という知識・判断が存在し、とくに「正しい」助詞が判断できないときには、それがより強く働いて助詞選択を決定していることになる。

これを示したのが下の表5である。ここでは、さきほどの「抑制・励起」指数において、「1.00」が「抑制」も「励起」もしない中立的な数値を意味するので、各指数から「1」を引いた数値を用いる。「プラス」は「励起」を、「マイナス」は「抑制」を示し、絶対値はその「抑制・励起」の強さを示す。なお、見やすさを考えて、数値は100倍してある。

数値が「設問」から「使用」を経て「回避」に向かって、連続的に増加または減少している場合は、本来の日本語とは異なる中間言語独自の「距離」情報が存在しており、助詞使用の決定に、この情報が一種の規則として働いていることを意味する。反対に、数値の増加または減少が、「設問」から「使用」を経て「回避」に向かって、連続していない場合は、「抑制・励起」が一定しておらず、名詞句の「距離」が格助詞の使用を中間言語レベルで左右していないことを意味する。

表5：「設問・使用・回避」における、「抑制／励起」の変化を示す指数

位置	ガ格			ヲ格			ニ格			デ格			斜格		
	設問	使用	回避	設問	使用	回避	設問	使用	回避	設問	使用	回避	設問	使用	回避
1項前	53	44	38	22	33	57	16	8	-10	-18	-15	-28	14	20	-29
2項前	-81	-79	-68	-31	-40	-56	-13	-9	6	25	13	30	-39	-24	85
3項前	-89	-14	14	-38	-92	-100	-69	-25	30	42	57	43	35	-54	-100

この表からは、全ての「距離」における「デ格」で絶対値がふらついており、また「1項前」における「斜格」でプラスとマイナスが入れかわっており、この2種類の助詞使用に対して、「距離」情報が必ずしも十分に影響していないことを示しているが、それ以外の「ガ格・ヲ格・ニ格」では、「抑制・励起」が連続して変化しており、「距離」情報が強く影響していることを示している。

3.5. 助詞使用の決定規則としての名詞句「距離」

上の表5に見える各格助詞、とくに「ガ格・ヲ格・ニ格」に対する「距離」の影響は、以下の3点にまとめることができる。

- (10) a 「ガ格」は、本来「1項前」で強く「励起」され、「2項前・3項前」で強く「抑制」されているはずであるが、ともに「使用」から「回避」へ、その「励起・抑制」が弱められている。
- b 「ヲ格」は、本来「1項前」で「励起」され、「2項前・3項前」で「抑制」されているはずであるが、ともに「使用」から「回避」へ、その「励起・抑制」が強められている。
- c 「ニ格」は、本来「1項前」で「励起」され、「2項前・3項前」で「抑制」されているはずであるが、「使用」から「回避」へ、その「励起・抑制」が弱められ、ついに「回避」では、「励起・抑制」が逆転し、「1項前」で「抑制」され、「2項前・3項前」で「励起」されている。

これは、次のように考えることができる。まず、「ガ格」である。中間言語としては、「ガ格」は、より動詞から遠い名詞句に与えられるという「距離」情報が⁽¹⁰⁾、その使用を決定する補助的な規則として働いていると考えることができる。これは文頭に近い位置に「主語」を置こうとする意識と関わっているのではないかと推測する。

つぎに「ヲ格」と「ニ格」である。ここでは、「ヲ格」と「ニ格」の選択決定には、語順の情報が強く関わっていると考えられる。つまり、動詞に近い位置の名詞句には「ヲ」が、比較的遠い位置の名詞句には「ニ」が与えられるという判断があるという考えである。

「ヲ格」と「ニ格」に関する語順としては、佐伯(1975)が以下の傾向を指摘する。

(11) 与格の「ニ」が対格の「ヲ」に先行する

しかし、これに対して徳永ほか(1991)および徳永(2000)では、この語順が、必ずしも強い傾向でないことが示されている。今回の調査は、日本

語学習者の中間言語としては、この語順が逆に強い傾向となっていることを示していると考えられる。

つまり、中間言語としては、「ヲ格」は動詞の直前にある名詞句に与えられ、「ニ格」は比較的動詞から遠い名詞句に与えられるという「距離」情報が、これらの使用を決定する補助的な規則として働いていると考えることができる。

3.6. 名詞句「距離」による格助詞使用の例

こうした意味で、「距離」情報は、中間言語における各格助詞の使用を決定づけており、これらは、後の例文に見られるような「回避」の理由を説明することが可能なものである。

まず、中間言語における「ガ格」の選択決定には、「1項前」での「励起」と「2項前・3項前」での「抑制」がゆるめられという「距離」情報がはたらく⁽¹¹⁾。以下の例は、それによって適当とは言えない「ガ」が名詞句に与えられた例である。

- (12) a *時折、左手首（が）着物の袖で隠すしぐさも見られた。
 b *老年人口の割合は、1950年の4.9%（が）1975年には7.9%に増加した。

次に、中間言語における「ヲ格」の選択決定には、「1項前」での「励起」と、「2項前・3項前」での「抑制」が過剰に適用されるという「距離」情報がはたらく。以下はそれによって不適当な「ヲ」が与えられた例である。

- (13) a *今、日本の社会は非常なスピードで高齢化(を)進んでいる。
 b *そして老年人口の全人口（を）占める割合は、……
 c *この島々の状況を、台湾の雑誌「時報周刊」から入手した写真（を）紹介する。
 d *北と西は、日本海（を）面している。

この「距離」情報は、中間言語においてかなり強くはたらいっていると考えられる。その根拠として、「回避」における「ヲ格」の全41の使用例を見ると、動詞の直前の位置である「1項前」以外のところに置かれたの

は、このうちの6例だけであり、しかもそのうち3例は、サ変動詞との混乱に起因すると考えることができるものであるということを挙げることができる。以下の(14)のような例である。

- (14) *市民が理解できない機関(を)改革をしなければ、解体の危機にある。

これは「機関を改革する」というパターンとの混乱であると考えることが可能であり、こうした例外を除くと、「ヲ」の使用は動詞直前位置に強く制限されている。

また、中間言語における「ニ格」の選択決定には、「ヲ格」と逆に、「2項前・3項前」での「抑制」が強く弱められる。以下はそれによって不適当な「ニ」が与えられた例である。

- (15) a *そこで育った自分の音楽(に)その人たちが聞いてほしい⁽¹²⁾。
 b *メジャー首相は両勢力の武力活動停止(に)「注目すべき前進」と評価した。
 c *集まった大勢の報道陣(に)「大丈夫ですか」と声がかかると、
 ……
 d *過激派勢力が停戦(に)足並みをそろえたことで、和平の流れが前進する。

これは「ヲ格」ほど強くないが、ある程度まで中間言語での「ニ」の使用を決定している。

4. 結論

以上の調査と議論をとおして、次の結論を提示する。

中上級日本語学習者の中間言語においては、格助詞の加えられるべき名詞句がそれをコントロールする動詞からどれほど離れているかという「距離」に関する情報が、格助詞の選択に関与している可能性が高い。

とくに「ヲ格」と「ニ格」の弁別的な選択については、「ヲ格」が動詞の

直前、「ニ格」がそれより遠い位置という、語順に関する判断が、過剰に適用されている可能性が高い。

注

- (1) この論文は、神奈川大学研究助成金による研究成果の一部である。また、この論文は2000年9月に中国大連で行われた「日本語教育に関する日中韓国際シンポジウム」での発表に基づく。席上貴重な意見を示された曲維教授、劉富庚教授に感謝する。
- (2) 以下でとりあげる例文では、もとの資料である助詞穴埋めテストの形式を残し、問題としてあつかう助詞を（ ）の中に入れて示す。
- (3) 実際に、今回の調査の中でも、「正しい」格助詞使用を決定する規則自体に対する違反によって起こる誤用も多く見られる。たとえば、以下の例はそれぞれ、aが連体修飾節における「が／の」交替の問題、bがヴォイスによる格変化の問題、に起因する。
 - a *EU (の) 拡大することは望ましいが、経済的に大きな問題を引き起こす。
 - b *窓 (が) 開けたくても、開かない。
- (4) ただし、母語からの転移が完全でないわけではなく、以下の2つの現象などには、転移を痕跡として認めることができる。
 - a 「ヲ格」の使用率が、中国語母語話者でやや低いこと
 - b 「提題取立」の「設問」正答率が、中国語母語話者でやや低いこと
 aについては、目的語前置の制約が比較的ゆるい中国語と、そうではない英語などとの差の転移として理論的に予想可能である。bについても、主題構造が優先的な中国語と、必ずしもそうではない英語などとの差の転移を想定することで理論的に予測可能となる。しかし具体的な例文について見ても、この転移を明確に示すデータは得られず、可能性としては転移による差があるものの、それは痕跡として残っているに過ぎないと考えるべきである。なお、生田ほか(1997)でも、母語からの転移は明確には認められないことが報告されている。
- (5) 生田ほか(1997)では、「ニ格」の正答率が悪かったが、ここでは「ニ格」を「ガ・ヲ・デ格」より強く悪いと判断する根拠は出なかった。
- (6) この問題を有標性の問題と考えることも可能である。もし、より普遍的な意味格である「主格」や「目的格」に対応すると学習者が考えるであろう形式を無標とすれば、各言語固有の情報に縛られやすい「斜格」の形式は有標とみなすこと可能だからである。ただし、Hyltenstam(1981)らが言うように、母語が有標で、目標言語が無標の場合は母語からの転移が起こらないはずであるが、

「マデ」や「ト」に比べると比較的無標となる「ヲ・ニ」などに対して、学習者母語の前置詞類が転移したのではないかと思われる「斜格」助詞における局所的な現象を認めることができる。次の例である。

- (i) a * 老年人口が、1950年の411万から、1975年(まで)の886万に増加した。
- b 老年人口、從1950年的411万、增加到1975年的886万。
- (ii) a * アイルランド統一(と) 目指すカトリック系勢力
- b the Catholic forces which are aiming at the unification of Ireland
- (iii) a * 韓国と日本の生活はともに、4半世紀ほど(と) 及ぶ。
- b His living in Korea and Japan has stretched over a period of 4 half centuries.

これに加えて後に触れる「ニ格」の問題があるので、本稿では、これを有標性の問題としては扱わなかった。

- (7) 「デ格」にも「斜格」と同じことがいえるが、「デ格」は、また「回避」での使用が「斜格」ほど抑制されていない。これは、「場所」を意味素性として持つ名詞句と「デ格」との組み合わせが、中間言語の知識として強固だからである。「デ格」の「設問」における意味役割比率は、様態が約10%、範囲や限度が約10%、場所が約50%、手段や道具が約20%、原因が約10%だが、「回避」においては、80%以上が次の例のような「場所」である。

* 駅(で) 電車の線路に沿って、西の方へ歩くと、踏み切りがあります。

その意味で、格助詞「デ」の選択を決定しているのは、「斜格」と同様の使用抑制に加えて、名詞句の意味素性の過剰適用であると考えることができる。

- (8) これは、この「距離」という情報が、助詞の置かれている環境として、比較的安定的なので、学習者が助詞選択を決定する際に利用しやすいという予測に基づく。このほかに、当該の助詞が置かれている文のレベル(単文か、複文かなど)や、前後に出現している助詞との組み合わせなどもありうるが、これらの情報は不安定で、とくに今回の資料では、各被験者によって異なって把握される可能性が高いので、本稿では取り扱わなかった。
- (9) 格助詞を持つ名詞句の語順に一定の傾向があることについては、佐伯(1975)および徳永(2000)を参照のこと。徳永(2000)では「ガ>ヲ>ニ>カラ>デ」の順が示される。
- (10) 佐伯(1975)および徳永(2000)で、「ガ格」が位格を除く他の格に先行することが提示されている。
- (11) ただし、「ガ格」の決定には、「距離」情報以上に、その格助詞がつく名詞句の意味素性や長友(1992)の示す「可変性・系統性」という要素のほうが大きいと思う。

(12) この例文は、「その人たち (が) 聞いてほしい」の「が」の誤用も含む。

参考文献

- Dulay, H. et al. (1982) *Language two*. Oxford Univ. Press
- Hyltenstam, K. (1981) 'The use of typological markedness conditions as predictor in second language acquisition'. In G. Pfaff (ed.), *First and second language acquisition processes*. Newberry House
- Keenan, E. & Comrie, B. (1977) 'Noun phrase accessibility and universal grammar' *LB* (1)
- 佐伯哲夫 (1975) 『現代日本語の語順』 笠間書院
- 徳永健伸ほか (1991) 「結合価に基づく日本語語順の推定モデル」『計量国語学』 18-3
- 徳永健伸 (2000) 「結合価情報を用いた語順の推定」『月刊言語』 29-9
- 生田守ほか (1997) 「上級学習者における格助詞「を」「に」「で」習得上の問題点」『日本語国際センター紀要』 7
- 長友和彦 (1992) 「「が」「は」運用の可変性と系統性」『お茶の水女子大学紀要』 45
- 山岡俊比古 (1997) 『第2言語習得研究』 桐原ユニ